

とあるウエイトレスの悩み

夜の街角にて、一人の魔女が占い師をしていました。

風呂敷ふろしきを地べたに広げながら、その上にちよこんと座っている魔女は、灰色の髪と瑠璃色るりしきの瞳ひとみが特徴的な少女。

黒のローブと黒の三角帽子、それから、魔女の証あかしである星をかたどったブローチをしています。

路上を挟むようにして伸びている背の高い民家たちより遥か上には星々が瞬またたき、手元に置かれた水晶玉に、まばゆい輝きを落としていました。

彼女は旅人であり、魔女でした。

「占い師さあん。あたし、もう駄目なのよお」

「はあ」魔女は酔っ払いの女性を前にして、顔をしかめておられました。

わけあって今は占い師をやっていました。

正直に告白してしまつと、単純に金欠だったので占い師の真似事をして小銭を稼いでるだけです。

「あたしの話、聞いて頂戴ちやうだいよお」

「相談料だけで金貨一枚頂きますけどいいですか？」

面倒くさいし、とつとと去つてもらいたいなと思ひながら大金をふっかけるその悪徳魔女は、一

体誰か。

そう、私です。

残念なことに目の前の女性は中々にお金持ちでした。

○

そもそもどうして占い師なのに人生相談など受けねばならないのか。

などと文句の一つも垂れてやりたいところでしたが、お金を貰^{もら}ってしまつては仕方ありません。愚痴^{ぐち}を聞いて差し上げました。

女性は少々ご自分を見失っているように見受けられましたが、お金を貰^{もら}っている以上、面倒でもお話を聞かないわけにはいきません。

「あたしい、この近所のレストランでえ、ウエイトレスをしてるんだけどお」

「はあ」

「もう仕事辞めたいのよねえ」

「辞めればよろしいのでは」

「最近のお客さんったら、酷^{ひど}いのよ？ 何かにつけてすぐ文句言うし、ミスの一つでもすれば鬼の首でも取ったみたいにわーわーぎゃーぎゃー文句言うし、文句言うし、文句言うし、文句言うし」

「文句しか言わないんですね」

「そうなの！ しかも、何もそこまで言わなくてもいいじゃない、って思えるくらいに酷い言葉を浴びせてくるのよ。挙句の果てには『お客様は神様だ！』とか言ってくる始末だし」

「ふむふむ」

「どうしたらいいと思います？」

「祈りでも捧げれば黙るんじゃないありません？」

「あたし真面目に相談してるのよ？ ひっく」

「と言われましても」

「そもそもさあ。あたしは確かに店員で、お客さんは確かにお金を払っている立場だけどさあ、でも、だから何？ って感じなのよねえ。確かにあたし達はお金を貰っている立場だけれど、けれど、お金を受け取って、お客さんが求めているものを、提供してあげてる立場でもあると思うのよ」

「ほうほう」

「だから思うのよ。あたし達の立場は対等だー！ って。そんなに文句言うなら、もう料理なんか作ってやらないぞー！ って」

「いや対等ではないのでは」

「何よお。占い師さん、あたしから金貨一枚を貰ってるんだから、もっと真面目に相談に乗ってよ。あたしお客さんだよ？」

「前ぜんげんてつかい言撤回したほうがよろしいのでは」

「うう……もうやだあ。仕事辞めたい」

「お辞めになればよろしいのでは」

「でもお金ない」

「さっき金貨一枚渡してくれたじゃないですか」

「それ全財産」

「返却しますね」

「占い師さん、優しい……。うう……。こんなに優しい人が世の中にはいるなんて……。世の中捨てたもんじゃないね……。ぐすん」

「……………」

「ねえ占い師さん。あたし、どうしたらいいと思う？」

「そうですね……。では一つだけアドバイスをして差し上げましょう」

「……………？ 何？」

「もう少し自分自身に正直になったほうがよろしいと思います」

「とうとう？」

「文句を言われたら言い返して差し上げればいいのです。あなたの気持ちをさらけ出してしまえばいいのです」

「そんなことができたなら苦労しないわよお！」

「そんなあなたにはこちら」

「？ なあに？ この瓶」

「それは魔法の水です。本当のあなたをさらけ出すことができますようになります」

「凄（すご）い……！ そんな水が存在するなんて……！」

「ええ。どうぞ。これは私からのサービスです。これを飲んで、明日からのお仕事も頑張ってくださいね」

「……うう。やだ。仕事したくない」

「まあまあそう言わずに」

それから何十分も彼女は私のお店の前でぐだぐだと愚痴（うそ）をこぼし、やがて、「あ、トイレいきたい」などとぬかしてから帰っていききました。

ぐびぐびと、私が与えた水を飲み、「凄（すご）い！ なんだか本当の自分が戻ってきた気がする！」と叫んでいました。

「……………」

まあ、あれはただの水なんですけどね。

酔（よ）いが醒（さ）めて気持ちも冷めれば、きっと本当の彼女が戻ってくることでしょう。

後日、その国で、あるお店のウェイトレスが話題になりました。

客に罵倒（ののし）を浴びせる、ひどい女性だそうです。注文を頼まれば舌打ちしながら卓に向かい、料理を運ぶときは蔑（あ）み目の視線をプレゼント。お会計のときは「は？ もう二度と来ないでよね」というリップサービスも欠かしません。

どういうわけか、この奇妙な態度がお客さん（主に男性）にたいへん好評らしく「罵倒されたい！」と、お店は瞬またたく間に大繁盛となりました。この国はおかしな人ばかりです。どうせウエイトレスにきつく当たっていたのも、しゅんとしてゐる女の子を眺ながめるのに妙な快感を覚えていたからに違いありません。この国はおかしな人ばかりです。

今や彼女は看板娘。

お店は連日大行列です。

彼女がこのような有様になったきっかけは一体何なのか。

とある新聞にインタビュウが載っていました。

『やっぱり本当の自分をさらけ出すことが大事だと思いました』
とのこと。

……………。

そういう意味じゃない……………。